

(記者代表質問①)  
自民党の再建に向けてどう取組むか。衆院解散・総選挙に向けてどう体制を整え、また地方組織の建て直しはどのように行うのか？

(二階総務会長)

福田内閣の組閣直前に、総裁選挙が行われた。全国各地の県連で党員投票による選挙をした。そのために、各県連が名簿その他の整理をしたが、ほとんど何のトラブルもなかった。他の役所の事をいう事もないが、名簿がないとか、そういう問題が一切なく、見事なものだった。投票用紙が届かないと言ってお騒がせした県連なんてないでしょう。私は、これは大したものだと思う。県議員や市町村会議員の皆さん、ご支援してくれている皆さんが今日の事態を心配してくれていることは間違いない。だから、この皆さんと力をあわせて、党本部もどんどん地域に出向いていろいろなご意見を聞きながら党の再建に立ち上がっていくことが大事だ。党首選挙が各地に出向いて行って演説会をすると黒山の人だかりができる。これは政治への期待と自民党しっかりしろとの叱咤でもあったのではないか。その理由に、一般投票の投票率が良かった。首長選挙と比べても随分と良かったと私は思っている。みんなの意識は十分にあるわけで、冷め切っているわけではない。党本部を中心に党再生への努力をすれば必ず地方は応えてくれる。党本部や省庁には、地域や地方の代表の方が毎日地域の要望を持って大勢来られるが、その結果が分からないということが多い。応えられることには限りがあるが、誠意のある回答をしていくことで、自民党は頼りにできると再確認してもらったことが大切だ。これまで、来られる方も要望を受ける側の私たちも多少緊張感を欠いていたのではないかと。緊張を欠いてきたとすれば、反省すべきではないか。

(記者代表質問②)  
臨時国会への対応に関して、政治資金規正法改正案への取り組みやインド洋での海上自衛隊の給油活動を継続する新法について、臨時国会で成立させるべきと考えるか？ また、テロ特などにに関して衆院での再可決の考え方は？

(二階総務会長)

臨時国会で審議される法案が近く出揃うことになるが、その中でもテロ特措法は最重要法案だ。そういう面で、我われはこの法案をいかに成立させ、給油活動を継続させるのが一番の問題だ。国会では野党対策も大事だが、党内議論をしっかりととして党内がまとまり、国民に対して自民党と民主党がどういう点で対立しているのかを理解してもらうことが大事。いつもの国会運営だけでなく、国民の理解を得る努力を真剣にしないといけない。また、政治資金規正法については1円からという声もある。公明党との政権合意の協議の中でも両党は考えを同じくしていることが確認された。1円というのは徹底的にガラス張りであることの象徴だ。しっかりと取組をすると同時に政治資金の問題については国民の皆さんの神経がここに集中している。これに対してはガラス張りで明確にやっていることを言えることが大事。そこで第三者機関に点検をしてもらい、明朗にやっていこうと。どこから見ても正しい報告だという事を見てもらえることが必要。だんだんと良い方向に向かっていくと思う。政治はもっと崇高なものだ。そんなことだけで、政治家は何をやっているんだという調子で国民から見られるようでは大きな事をやっていけない。重要なことをやっていくために、政治資金のことで引っかかっているようでは駄目だから、これを引き越える努力を真剣にやっていかないといけない。

(記者代表質問③)

経済運営について、年金の国庫負担引き上げにどう対応するのか。消費税の引き上げについての考え方は？

(二階総務会長)

基礎年金の国庫負担を2009年度までに三分の一から二分の一に引き上げることになっていることはご承知の通り。今後の税制改正の議論の中で、活発な議論が展開されることを望む。我われ総務会としても政調会とも十分に連携をとり、税制改正の論議が広く国民の皆様にもご理解頂けるように務めてまいりたい。そこで、財源の問題が出てくるが、あらゆる財政運営の中で知恵を絞って、節減をしておこなうことが第一義的には大事なことです。それでもどうしても財源が足りないということになれば、そういう問題についても議論を深めていく事が大事。だんだんとこのことについても、国民の皆さんも財源なくしてどうして改正、改革ができるのかという質問が様々な場所で聞かれるようになってきた。今までは税の問題は常にタブーだった。みんなあつものに懲りてという感じだった。そんなことを言うて過ごせる時代はよかったかもしれないが、これ以上前に進むこともできなければ後ろに退くこともできない事態に陥ったときには、私は政権与党として積極的に国民の皆さんにありのままの姿を訴えてどちらを選択されますかということを真摯に聞く。そして、一緒に考えて頂く。場合によっては選挙の結果で問うということもあるだろう。その他にも、いろいろと知恵を出し合うことが大事だ。ようやく議論を深めていくという事に関しては、ほぼ国民の皆さんの合意が得られそうな状況になっていると思っている。野党も含めて。

(記者質問)

今回の役員改選で選挙対策委員長というものができたが、幹事長との役割分担ではどのような姿が望ましいか？また、公認権についてはどちらが判断するのか？加えて、党四役の中の総務会長の役割をどのように認識しているか？

(二階総務会長)

党は最終的には総裁が選挙の場合においても、選挙の総責任者として重大な責任を担っている。それを四役でそれぞれ責任を分担し、協力し合う姿が大事。役所の仕事のようには、縦割りですべていたら政治にならない。それぞれの地方から相談に来る。私も総務局長を担当したが、総務局長と幹事長の仕事の境目がどこにあるのか、そんなことを一日も考えた事はなかった。毎晩、夜中の一時、二時までやる。それで、昼間に文句をいっぱい言いに来てくれるような各グループの代表者、顧問弁護士のような人がたくさん来る。でも、日曜になると来なくなる。自分の日程もあり、選挙の応援に行かないといけないから。だから、最終的には党本部には人がいなくなる。だから、こういうことになって、党本部が落ち着いていくのだなと。これが、全員が集まってこられたときには、話しはまとまらない。私は郵政選挙の時、衆議院が解散したが地元には帰れない状況だった。だが、告示の日だけはちょっと帰らせてもらおうと、みんなの了解をもらって帰ったが、事務所に入ったときには午前1時とか2時とかいう時間だった。しかし、そこへも電話が一本入った。いよいよ今日から選挙に入ったから頑張れとか頑張ろうとかいう電話かと思っ取ったら、まだ調整の延長線にある話を相手が出てきた。そのときは私はやかましく言うてやった。誰に言ったとは言わないが、有名な人だ。「何を言っているんだ、今頃まで。今日は告示の日だ！」そんな状況だった。私はかつて新進党にいて選挙の責任者をしたこともあるが、携帯電話をいくつ持っていたても鳴りっぱなしだった。それから、選挙の時は周りに人が必ずいる。そこから電話をかけてくるから我々に文句を言うだけでなく、周りにも気合をかけるために話しをしている場合もある。選挙の調整は、ここからは幹事長の仕事、ここからは選挙対策委員長、ここは総務会長、政調会長というように実際には分けてやれるものではない。そこは常識的に助け合いの精神でやっていかないと駄目だ。手柄話は後だ。勝っ

てからの後。選挙を負けたら同罪だ。誰が悪いなどと言えない。この間、プロ野球の楽天の野村監督から電話があり、「選挙もプロ野球も同じですね。勝たないと駄目です」と言われた。私は、「全くその通りです」と答えた。勝たないと駄目だ。勝つために全力を挙げる。

(記者質問)

復党問題についてはどのように考えるか？

(二階総務会長)

平沼議員は実績もあるベテラン議員だ。早く党に帰り働いて欲しいという期待もある。しかし、一方で他の部分に亀裂を生んでは円満な党運営にならないのではないか。全体を見渡して考えないといけない。また、落選した人と上がってきた人とは全く別の問題だ。現職の人に対しては我われが立候補を要請した。党のため、郵政民営化のためにとって頼み、その人の気概、男の人だったら男気、女の人だったら、何と言ったら良いのか。まあ、そういう気持ちを持って自民党に参加し、協力してくれた。前回の選挙で勝ちすぎたからもう良いですというのは、幹事長でも総裁であってもそんなことは言えない。常に前進していかないといけないが、原理原則をすっ飛ばすのはダメだ。

(記者質問)

公認については支部長が優先されるのか？

(二階総務会長)

細かい事はこれから選対で決める事になるだろうが、一つの選挙区で二人の議員が出ている場合、選挙区と比例になるという方法もないわけではない。自由民主党という党の名の下でしっかりと調整をすればよい。そのために、私も積極的に手伝う。

(記者質問)

公認候補の調整はいつまでにメドを付けるのか？

(二階総務会長)

一般の郵政解散選挙の時には、解散した時点では候補者の数が足りなかった。私はたまたま補欠選挙の候補者応援のために福岡へ行って、その足で熊本に行った時に、調整をしてきたが、これをこれから30も40もやると思うと、気が遠くなるような思いだった。解散がきて、直ちにやらないといけない。大変難しい局面がたっくさんあった。ただ、300の選挙区があれば300通りの調整がある。外から見ている人は1人や2人と思うかもしれないが、1人1人ちゃんと説明がつくようになっていく。いい加減な選挙にはなっていない。限られた条件の中で誰が見ても公平だと答えられる人を選ぶように気を配った。日がないということが質問の裏にはあるのだろうが、前回を考えれば時間は十分ある。押ししても引いても落ちないAクラスの人、もうちょっと努力が必要な人がいる。日常の活動を見ながらどういう努力をしているのか、その県に行けば分かる。何ヶ月も帰っていない人もいる。地元の人にもお盆にも帰らない人も乗って手を振ったとしても、どのどなたが帰ってきたのかとなる。今は、線香をあげることもいけないが、それでも地元の人とお盆を一緒に過ごすことが大事。日常活動で付き合いがあれば、選挙の時にもみんなが集まってやろうとなる。一番分かるのは雨の日だ。雨の日で暗くなっても傘さして待っていてくれるという時には、政治を担うものは全く真剣に取組まないといけないと思う。地域の人の期待に応えないといけない。この間の参議院選挙の結果で、自民党の衆議院の側も緊張している。この緊張感をもって選挙戦に入っていく。国会活動と選挙活動を同時にやっていくことが我々に架せられた宿命だ。だから、総裁がどうか、幹事長がどうか言って、他に問題点を持ち出してくることが多いが、やはり、問題は「我にあり」だ。自らがこの選挙戦にどう取組むかという事だ。そのプランをきっちり立てた上で党の応援や閣僚の応援というものがある。確かに、大臣が入れば人が集まりやすい。珍しいからちょっと見

ようかと。だが、集まってきた人が票に結びつくのかとなれば結果を見ないと分からない。一般の選挙でも大勢人が集まったところはあったでしょう。だから、集まるのと選挙とはちよつとずれがある。良い方にずれれば最高だが。

(記者質問)

選挙区対応で幹事長と選挙対策委員長が割れた場合には、積極的に関与していく考えはあるか？

(二階総務会長)

できる範囲において積極的に協力する。選挙が一番だ。この今の時期において、一般の第一回目のマスコミの調査のように、福田総理に対する期待が大きいということになり、大変ありがたいが、本番は選挙だ。そこでどれだけの成績を残せるかが今後の自民党と政権の消長にかかっている。私はこのことを最重点に考え、協力できることは何でもしたい。

(記者質問)

改めて、解散の時期については？

(二階総務会長)

時期については、答えはおもしろくないかもしれないが、内閣総理大臣の専権事項だ。総理も経験豊かな人で、じつと時代や党の空気や野党の状態を判断するかなり鋭い目を持っておられるので、総理は自由民主党が一番有利なときに解散に打って出ようと考えるのは当然の事だ。我々はその条件を整えるために少しでも努力していく。衆議院でも300近く議席があるのだから、参議院と一つになって政策を編み出し、どう集大成していくのかを考える事で0・1%でも支持率を上げる努力をしていく。これが選挙に必ず繋がる。これまで自民党は少しゆったりしているところがあった。今、剣が峰に立ち、後ろに引けないというときに、われわれは真剣に選挙戦に臨みたい。